

29
2019.5

薬友会報

千葉大学薬友会



桜の風景 ～薬学部校舎を背景に～

薬友会長・研究院長挨拶……………	2	2019年度 大学院医学薬学府	
退任のご挨拶……………	2	入学者の状況（4月入学者）……………	17
新任のご挨拶……………	3	第104回 薬剤師国家試験合格状況 ……	17
医学薬学府学部長挨拶……………	3	2018年度 卒業生・修了生の進路……………	17
薬学部この一年……………	4	2019年度 薬学部入学者の状況……………	17
会員便り……………	6	2018年の受賞記録……………	18
研究室便り……………	10	薬友会より……………	19
クラス通信……………	12	第28回千葉大学大学院薬学研究院	
支部便り……………	14	薬友会生涯教育セミナー	
サークル紹介……………	15	宮木高明記念講演会開催のお知らせ……………	20
学部だより……………	16	薬剤師卒後教育研修講座開催のお知らせ……………	20
教員の人事異動……………	16	編集後記……………	20

薬友会長・研究院長挨拶

石橋 正己



薬友会会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。最近の千葉大学および薬学研究院・薬学部最近の主な動きを紹介します。

千葉大学薬学部では、平成31年度から薬学科の定員が10名増員され、薬学科（6年制）50名、薬科学科（4年制）40名、合わせて1学年90名となりました。この画期的な増員により、本薬学部では、高い研究能力と国際的リーダーシップを持つ「特別な資質を有した薬剤師」の養成を目指します。最近では薬剤師国家試験合格者のうち国立大学出身者は5%程度であることから、千葉大学出身の薬剤師免許取得者は極めて貴重な人材といえます。企業や行政機関、研究機関からも、優れた研究能力をもつ6年制学生に対する受入れ要請は増加しており、千葉大学薬学部はその要請にしっかり応えていきたいと考えています。

全国の薬学部では、平成27年度入学者から適用されている改訂モデル・コアカリキュラムに基づき、薬剤師として求められる基本的な資質（10の資質）を設定しそれを身につけるための学習成果（アウトカム）基盤型教育に重点が置かれています。千葉大学薬学部でも、カリキュラムの見直しやシラバスの充実化、それに関するFD活動が継続的に実施され、ルーブリック評価、アクティブ・ラーニング（SGD、PBLなど）を多く取り入れた授業も行われています。時間数の3割は大学独自のカリキュラムを実施することとされているため、学生が疲弊せず、より高いレベルの薬剤師・研究者を目指す積極的な学生が増加することを期待して、柔軟で活力のある教育が求められています。とくに博士の学位を有する薬剤師の養成は今後の薬学領域の発展のためには必須であり、志の高い学生が希望をもって学ぶカリキュラムが望まれます。

平成31年度は第3期中期目標期間の第4年目となり、千葉大学ではこれまでに研究機能の強化に向けたグローバルプロミネント研究基幹による研究プロジェクトの推進を始めとする様々な改革が行われてきました。しかしながら、国からの運営費交付金が継続的に減額され、補充人事の遅れなど、教育面での機能低下ばかりでなく、引用頻度の高い論文数などの研究面においても負の影響が出始めています。さらに、平成30年末には国立大学の運営費交付金の傾斜配分枠の拡大計画が明らかとなり、総額の約1割（約1000億円）を若手研究者比率や教員一人当たり外部資金獲得実績などの成果を中心とする実績状況に基づいて配分されることとなりました。千葉大学は「世界最高水準の教育研究をおこなう卓越研究大学」（いわゆる第3群の16大学）とその配分枠をめぐる競争が激しくなると見られます。しかし、薬学研究院に関しては、先生方による外部資金獲得（受託研究経費等の受入）は、平成29および30年度は前年度比各々191%、114%と年々増加しており、また数々の学会賞の受賞など先生方による特色ある研究活動の成果が継続しておさめられています。

本薬友会活動に関しましては、現在、上記のように厳しい環境の中、平素より業務多忙な薬学研究院教員による5つの委員会を中心として運営されていますが、今後は教員の競争力強化に向けた負担軽減のために様々な方策を検討することが必要です。薬友会会員の皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

退任のご挨拶

荒野 泰



平成11年4月に千葉大学薬学部教授として赴任して以来、20年の長きにわたり、多くの皆さまのご指導とご支援を賜って参りましたが、本年3月末をもちまして定年退職を迎えることとなりました。

着任して1年間は大橋國雄教授とご一緒させて頂きましたので、比較的余裕を持って準備を進めることができました。研究室も当初は総合校舎2階の1室でしたが、すぐに1号棟1階の会議室を実験室に改築して頂きました。さらに、亥鼻移転後の15年間は、医学薬学総合研究棟I 6階の薬学部RI実験施設と同じフロアとたいへん恵まれた環境で過ごすことができました。概算要求のプロジェクトを通して小動物用SPECT/CT装置を設置頂いたお陰で先進の環境で研究を行うことができました。これらはすべて歴々の薬学部・薬学研究院の皆さまのご厚情によるものであり、心より感謝申し上げます。

着任して以来、金属RI標識ペプチドや低分子抗体の投与で観察される腎臓の放射活性を低減する標識薬剤の開発、金属としてのTc（テクネチウム）やGa（ガリウム）の性質と多価効果を融合した中低分子標識薬剤の新規設計法の開発など、放射性薬剤新規開発のための基盤技術の構築を行ってきました。センチネルリンパ節検出薬剤の開発などの応用研究も行いました。これらの成果発表を通して、国内外の多くの先生方と密接な関係を構築できましたのは、私の大きな喜びであります。それと共に、研究室での体験が、卒業生の皆さんの現在に対して何らかの形で役に立つことがありましたら、私の望外の幸せです。

学外では、IAEAのプロジェクトへの参加を通して、米国に加えて欧州の研究者との密接な関係を構築できましたこと、そして、核医学会、病院薬剤師会、診療放射線技師会などの代表者からなる会議を取り纏め、「放射性医薬品取り扱いガイドライン」を策定できたことが強く心に残っています。

卒業（修了）する学生と新たに研究室へ配属した3年次学生とが混在するこの時期になりますと、1年間を顧みて4月からの計画を考え直すのが毎年の行事でしたが、驚くほどの速さで20年が経過してしまったと実感しています。それと同時に、20年間こうした幸せな日々を過ごすことができ、本日を迎えることができましたのは、偏に様々な形で支えて頂きました皆さまのご厚情の賜であるとしみじみ感じます。有り難うございました。末筆となりましたが、千葉大学薬学部・薬学研究院の益々のご発展を衷心より祈念申し上げます。

新任のご挨拶

西田 紀貴



平成31年4月1日付けで、千葉大学大学院薬学研究院、薬品物理化学教室の教授を拝命致しました。ちょうど元号が平成から令和に改められることが発表された日に歴史と伝統のある千葉大学大学院薬学系研究院の一員に加えていただきましたことに心より感謝致しますとともに、責任の重さに身の引き締まる思いです。薬友会報の紙面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成16年3月東京大学大学院薬学系研究科の嶋田一夫教授の研究室で学位を取得しました。その後、米国Harvard Medical SchoolのTim Springer教授の研究室で約3年間博士研究員として留学し、平成19年から再び嶋田一夫教授の研究室に助教として着任し、准教授を経て現在に至ります。

これまで私は主に核磁気共鳴 (NMR) 法を用いた研究を行ってきました。NMR法はX線結晶構造解析などの他の構造生物学的手法と比較して、①タンパク質が柔軟に揺れ動く動的な構造情報を抽出できること、②生きた細胞内のような分子夾雑系でも構造解析が可能であることなどの特長があり、私はこのようなNMR法の特長を最大限活用した研究を行ってきました。例えば接着分子CD44の研究では、CD44がリガンドであるヒアルロン酸に対して結合性が異なる2つの状態間の動的構造平衡状態にあり、CD44が内皮細胞上をローリングする上で構造平衡の存在が必須であることを示しました。また、細胞内のタンパク質のNMRシグナルを直接観測するin-cell NMR研究では、独自に開発した手法を駆使して細胞内の抗酸化タンパク質やシグナル伝達タンパク質の構造や活性変化をリアルタイム観測し、その機能解明を行ってきました。

今後も動的な立体構造解析に基づくタンパク質の機能解明をさらに発展させ、サイエンスに貢献する研究成果を挙げることを目指したいと思います。また近年発展が著しいクライオ電顕などの新しい技術を組み合わせた研究にも取り組んでいきたいと考えています。

昨今の技術革新、特に機械学習や人工知能 (AI) の進歩は、これからの社会を大きく変え、AIで出来ることはAIに取って代わられると時代が来ると予測されます。学部、研究室における教育面では、このような時代でも通用する「課題発見能力」と「問題解決能力」を兼ね備えた人材の育成に注力したいと考えております。微力ながら本研究院の発展に貢献できるよう努力して参りますので、ご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

- 1) Mochizuki A, Saso A, Zhao Q, Kubo S, *Nishida N, *Shimada I, Balanced Regulation of Redox Status of Intracellular Thioredoxin Revealed by in-Cell NMR. *J Am Chem Soc.* 140; 3784-90 (2018) (*double corresponding author)
- 2) Suzuki T, Suzuki S, Umemoto R, Ogino S, Nishida N, Shimada I, "Mechanical force effect on the two-state equilibrium of the hyaluronan-binding domain of CD44 in cell rolling" *Proc Natl Acad Sci U S A.* 112; 6991-6 (2015)

医学薬学府学府長挨拶

伊藤 素行



今年度より、医学薬学府学府長を務めさせていただくことになりました。これまでの副学府長としての2年の経験を活かし、より一層気を引き締めてまいります。

昨年度は修士課程総合薬品科学専攻65名、後期3年博士課程先端創薬科学専攻17名、博士4年先端医学薬学専攻5名が課程修了致しました。修士課程総合薬品科学専攻で1名、博士4年先端医学薬学専攻で2名が優れた研究業績を上げた認められ、半年～1年早期修了いたしました。4月より医学薬学府薬学領域では修士課程総合薬品科学専攻50名、後期3年博士課程：先端創薬科学専攻 10名 (薬学領域)、4年博士課程：先端医学薬学専攻 薬学領域9名)の新入生を迎え、基礎生命科学ならびに医薬品創製に貢献できる国際性豊かな獨創性ある研究者および高度の専門技術と研究能力を備えた先進的医療人の次世代リーダーの育成にあたります。

薬学研究院では、千葉大学グローバルプロミネント研究基幹 (GP：千葉大学が研究の核となる新規性・獨創性を備えた多様で発展性のある研究グループを創出支援するシステム) に複数の研究者が主幹研究者として参画し、グローバル研究交流を行っています。昨年度、このGP支援により、海外著名研究者の招聘やカナダアルバータ大学との合同シンポジウムを薬学部120周年講堂で開催致しました。今年度も引き続き同様のグローバル人材ネットワーク構築の発展が期待されます。さらに、医学薬学府では、昨年度、海外交流、グローバル教育研究のため、6名の短期・長期間の大学院生の海外派遣・受入に加えて、ダブル・ディグリー・プログラム (統合された学修プログラムを提供する2大学により学位記を授与) をタイ国立チェンマイ大学薬学研究科とも開始しました。これを受けて4月よりチェンマイ大学薬学研究科のダブルディグリー博士課程学生1名を受け入れています。また、4月より武田薬品工業株式会社との連携講座を設置し、優秀な社会人の博士学位取得促進や大学と企業との人事交流を行い、産学共同による教育・研究を進めています。

今後も、薬学・医学の未来を担う重要な人材である修士・博士課程修了生の育成に努力してまいります。引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

齊藤和季教授が紫綬褒章を受章

平成30年11月2日付けで発表された秋の褒章において、齊藤和季先生が紫綬褒章を受章されました。齊藤先生は天然資源系薬学・植物分子科学の領域の研究を進め、植物が生産する多様な成分の生合成メカニズムや制御システムを解明して来ました。そして「なぜ植物は薬となる成分を作るのか」という基礎的な疑問に対する答えを次々に明らかにしてきました。特に、生薬学という薬学では最古の学問領域にメタボロミクス等の最新のオミクス科学解析法を取り入れ、ファイトケミカルゲノミクスという新しい研究領域を開拓したことが高く評価されました。これらの業績は多くの論文被引用件数という客観的な指標によって国際的に高く評価されています。先生は、文部科学大臣表彰、日本薬学会賞、日本生薬学会賞、日本植物生理学会賞、日本植物細胞分子生物学会賞等の受賞に続き、今回の紫綬褒章受章となりました。



薬学科入学定員の10名増について

齊藤 和季

本年度の入学者から本学部薬学科（6年制）の定員が40名から50名に増員され、薬科学科40名と合わせて薬学部としては1学年90名に拡充されました。これは53年前の昭和41年（1966年）に80名に増員されて以来の入学定員増という大きな出来事ですのでこれに至る経緯を簡単に記します。

3年前に私が研究院長を拝命した際に徳久学長から託された大きな課題は薬学部の将来構想、特に6年制学科と4年制学科の定員バランスとその方向性、の明確化でした。そこで、研究院長就任直後に薬学部の全教授と個別面談をおこない、この問題も含めて忌憚のない意見を伺いました。その結果、研究能力の高い先進的な6年制薬剤師教育と創薬などの研究者養成の4年制学科の双方を強く推進すべきという意見に一致していました。研究能力の高い薬剤師教育が国立大学薬学部には求められているという内外の状況や、関東において薬剤師免許のとれる国立大学の定員が千葉大（定員40名）と東大（定員8名）だけでは明らかに不足しているという社会的な要請を考慮すると、6年制学科の拡充が優先的な課題でした。しかし、そもそも入学定員増にはそのための‘定員資源’が必要ですし、また文科省の姿勢も国立大学の6年制学科の定員増には極めて慎重でした。

その中で、学内で学部定員減を検討している他学部があるとの情報が入りました。これは学内の‘定員資源’を活用する大きなチャンスでしたので、すぐに非公式に定員増に名乗りを上げ具体的な検討に入りました。同時に、文科省に対しても複数のチャンネルを活用して接触し、いままでの本学部の取組や卓越性を理解して頂きました。さらに、卒業生を含む民間企業、研究機関、行政を含む公的機関、オープンキャンパスに来た保護者・高校生等（在学生については前年にアンケート済み）へのアンケートによる外部からの意見徴収も行いました。当然ながら、学部内においても様々なレベルで何度も議論、検討を重ねました。その結果、薬学科の定員を10名増やす（収容定員としては60名増）と共に、薬学科を2コース（薬学研究開発コース、先端医療薬学コース）に改組するという骨子が固まりました。

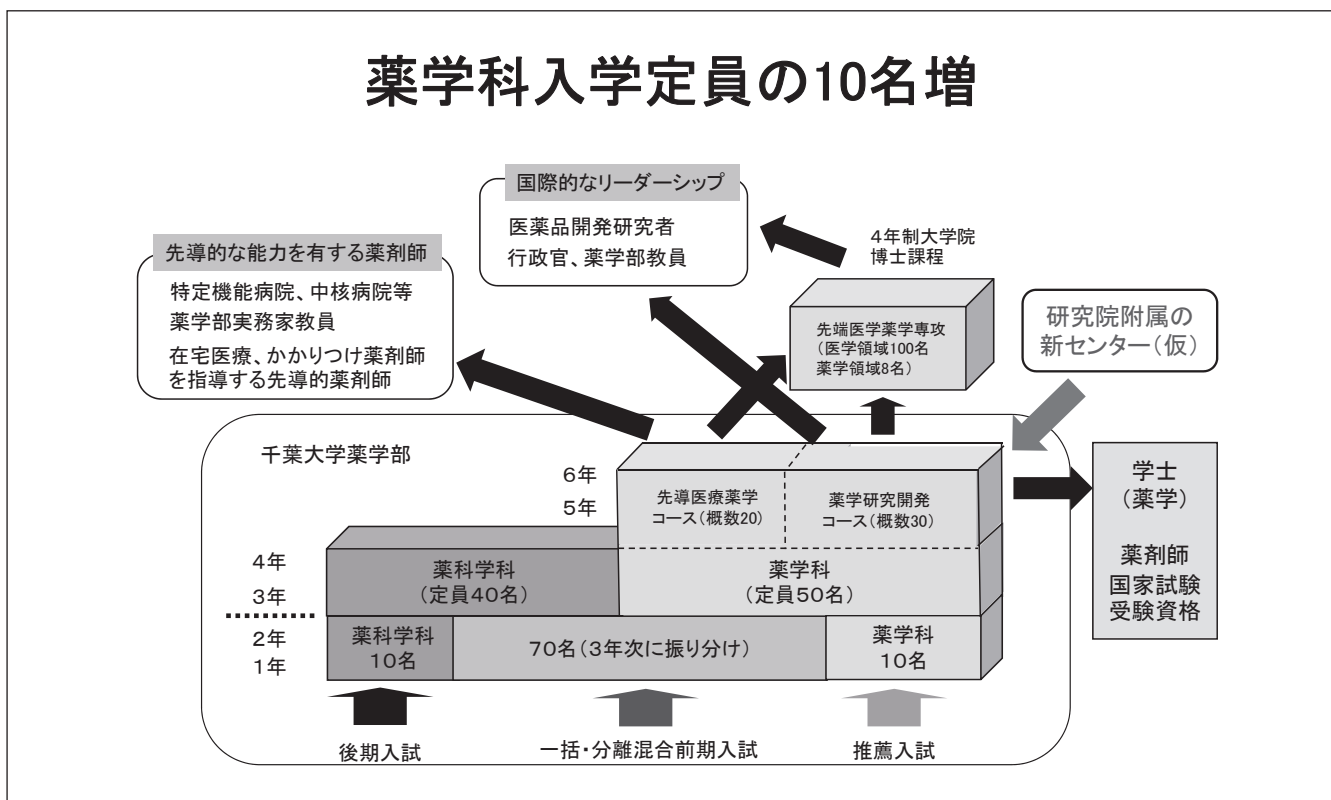
その後、約1年以上かけて、改組案の学部内での詳細な検討、大学内での説明、検討と調整、文科省への複数回の説明と意見交換、他大学を含む学外との調整などに奔走しました。その結果、私の任期終了直前の平成30年春に文科省からの概算要求事項として図のような改組案が認められ、平成31年4月入学者からの定員増が認められました。

国立大学の薬学部には4年制学科による創薬などの研究者養成と共に、高い研究能力を有する薬剤師免許取得者の養成が求められます。歴史的な経緯もあり、私立大学薬学部に比べて国立大学では6年制学科の定員が少なく設定されています。そのため、将来の薬学部教員として期待される優れた研究教育の見識を有する、国立大学を卒業した薬剤師免許取得者が不足する事態が危惧されています。また、医療行政や医薬品開発などで活躍する薬剤師免許取得者や、中核病院等での指導的な立場の薬剤師なども同時に求められています。今回の6年制薬学科定員増と2コース制への改組は、これらの社会的な要請に応えるものです。

特に、東大や京大の6年制学科の定員が極めて少数（東大は8名、京大は15名）に設定されている中で、日本全体の中での薬学分野の将来的な発展と、医療分野の中での薬剤師が果たす役割を考えると、千葉大学薬学部の立場とそれに課せられた使命は極めて重大です。私には、2006年に薬学部6年制が始まって以来この10～20年は日本の薬学の140年の歴史の大きな転換点であるように思えます。全国の薬学部のなかでも最古の歴史を有する本学部は、薬学分野全体の発展を考え、未来を見据えた将来展望が必要であり、今は将来の発展への大きな好機であると思います。

学生定員数（正確には収容定員数、入学定員に修業年限を乗じた員数）は様々な資源配分の根拠になりますので学部の将来の発展にとっても極めて重要です。今回の定員増が今後の千葉大学薬学部の発展と、日本の薬学分野全体の前進に向けての大きな契機になればと思います。この改組を踏み台にして、本学部は先端的な強い薬学の基礎教育研究と薬剤師としての先進的な職能教育研究の両者を実現できると思います。

最後に、このような改組を実現するにあたり、多大なご協力、ご助言など頂きました、文科省関係者、学内関係者、学部内教員および事務部の皆様に感謝申し上げます。



成績優秀者賞・論文博士優秀発表者決定

平成30年度学部長表彰者には、岡田ひとみ（薬科学科）さんと佐久間絢子（薬学科）さんが、平成30年度薬学科卒業論文発表会優秀発表賞には、綾部真織さん、高橋静織さん、照井亜侑さん、永井咲紀さんが選ばれました。修士論文優秀発表賞には、川端遥さん、竹添智宏さん、田森瑞貴さん、蒔田吉功さん、望月龍さん、横山夕将さんが選ばれました。また、4年博士課程薄田健史さん、修士課程北村啓太さんが医学薬学府長表彰成績優秀賞を受賞しました。それぞれ3月22日の卒業式と3月26日の学位記伝達式の際に行われた表彰式で、表彰状と記念品が授与されました。

会 員 便 り

大森 栄 (信州大学医学部附属病院、教授・薬剤部長)



私の最終学歴は千葉大学大学院薬学研究科博士後期課程中退となっています。なんとなく着地に失敗した体操選手のような気持ちになります。中退は出身研究室(薬物学研究室)への奉職によるものであり、それなりに大きな夢を持って勤務しておりました。しかし、恩師である北川晴雄教授が突然お亡くなりになり、その後、病院薬学研究室を経て千葉大病院薬剤部への転職となりました。動物を相手にしての格闘から、患者さんへ最高の薬物治療をと頑張ることとなったわけです。そうして四半世紀余を経て、職場も信州大学医学部附属病院へと変わり、社会人としての人生の最後を迎える事となった今、研究者として一步を踏み出した千葉大学薬学部薬物学研究室、病院薬学研究室が本当に懐かしくまた自分の原点である事を実感します。薬学部は現在亥鼻に移転しておりますが、年に一度程度訪問しています。同級生であった高山廣光教授の部屋を訪れることもあります。当時の研究室は名前も変わらず、また病院薬剤部も改築されたもののほぼ同じ場所に位置しており、違和感は感じませんが、幾つかの研究室の名前が変わっていることや新たな研究室が開講されているのには時の流れを感じます。今年は定年の最終講義等を控え、4年生時の研究、卒業論文、研究室での充実した研究生活その他を改めて振り返り千葉大学での20有余年の数々の事を懐かしく思い出しております。

(昭和52年卒業)

廣田 孝司 (信州大学医学部附属病院 臨床研究支援センター)



偶然にも本稿の締切日の翌日に、我々74P(1974年入学の薬学・製薬化学の両学科)のクラス会が開かれる。既に3、4年おきに10年ほど続いている。初回は自らの変化を棚に上げ、お互いの変貌には驚いたが、今は幼馴染に会う楽しさに近い。4年ぶりの今回、もちろん社会との関わりは持ちつつも、多くは第一線から退き、良い意味で脱力しているだろう。現役世代、我々のほとんどは重い責任を負う仕事に従事し、本学薬学部卒業生として十分社会に貢献してきたと思う。

約40年前、私は当時の「薬物学教室」の修士課程を終え、製薬会社に入社した。薬物動態関連の研究所に20年、国内外の開発部門等に7年半在職し、この創薬現場で薬づくりの素晴らしさ、充実感をしっかり味わった。その後私大の薬学部に移り、薬物動態の研究と講義で約10年。若い学生との実験やディスカッションは、常にわくわく、ドキドキでリフレッシュさせてもらった。そして今は、これまでの知識や経験を基に、看護大学で薬物動態の講義や大学附属病院で治験や臨床研究のお手伝いなど、マイペースで続けている(時々、城巡りしたり：写真参照)。

学生時代、現役時代のように、新たな経験や知識を旺盛に獲得することはできないが、これまでの「在庫」が何らかの役に立つのなら、ぜひ役立てたい。人生100年時代? もしそうなら、まだまだ、先は長いから。

(昭和56年修士課程修了)

伊藤 美砂子 (一般社団法人 千葉保健共同企画 本社 代表理事)



新年号に切り替わる年であるが、彼方昭和57年に卒業し薬剤師としてのキャリアをスタート、企業、保険薬局8か所、病院3か所を渡り歩いて今に至る。その間に4人子育て期を過ごし、日本各地に転居7回。仕事でもプライベートでも色々あったなと思いつき返すことが出来るようになった。あれもこれもと貪欲に追い求めたころの様に気だけ若くても、目のかすみと寝落ちに歳を感じる。

幸いなことに働く仲間と場を得て、現況厳しい保険薬局業界でまだまだ頑張るつもりでいる。1年に1回1週間ほど出掛ける海外旅行は、日頃の疲労を癒し次の1年分の英気を養う大切なプロセスであり、異文化に触れ視野が広がり好奇心と胃袋を満たしてくれる。

渡航した国々は、スペイン・ポルトガル・インド・デンマーク・ノルウェー・アイスランド・トルコ・スイス・アラスカ・カナダ・メキシコ・アメリカ・ソビエト・韓国・ニュージーランド・クロアチア・スロベニア・オーストリア・ドイツ・ベルギー・イタリア・オーストラリア・チェニジア・エジプト等々、その土地の鉄板な観光地でなく、一風変わった場所ばかり、異国情緒のスリルも味わいながら言葉は二の次、その地で暮らす人々との触れ合いを大事に体が動く間は続けたいと思う。

生きる時間と稼いだお金をどのように使うのか、価値観はさまざまであるが、私の人生、これが人生、悔いなく全うできたら最高です。

(昭和57年卒業)

関根 利一（城西国際大学）

母校での19年間の助手生活の後、県内新設薬学部へ転出して15年余りが経過した。平素の無沙汰をお詫びしてこの間の報としたい。

着任して2年間は週4コマの講義と12コマの実習に慣れるのが精一杯であった。2年目からは旧・千葉県大多喜菓草園の指定管理を受け、以後10年間、毎年15,000人の入園者を迎え入れる努力をした。3年目からは法人直轄の入試部員となり、南は沖縄・四国、北は青森まで高等学校を駆け巡り、100回以上の模擬授業を行った。国際大学としての海外募集にも携わり、中国北部の大都市の日本語学校、提携大学の日本語学科への訪問を繰り返すなど5年間は全学の学生募集に奔走した。

4年目からは硬式野球部長を命ぜられ開学20周年までのリーグ優勝を期待された。土日には球場へ足を運び、公式試合ではベンチ入りし公約通りに（薄氷を踏む思いで）優勝を果たせた。以後、部は神宮球場での全国大会まで駒を進めた。5年目には新学部の設置準備委員の辞令を受け、分厚い申請書類を作成して文科省高等教育局へ赴いて局員との折衝を繰り返し、開設にこぎ着けた。この件に関しては山本恵司教授に大変お世話になった。改めて御礼申し上げたい。

その後には、高門宮家三女の絢子女王殿下を入試部員として本学にお迎えすることができた。昨年のご成婚をお祝い申し上げる。

震災後は手薄になった学生部へ配置換えになった。学生部長としての間は、川淵三郎杯・少年サッカー大会を主幹するなどあらゆる学生事案に係わり、大学と共に歩んだ4年間だった。2年前に実家の母が倒れ老健でお世話になっている。今春、父が倒れ入院中で、今は両親の介護、看護に明け暮れている。

年々歳々花相似 歳々年々人不同

（昭和59年卒業）

細川 正清（千葉科学大学薬学部薬物動態学研究室）



私のライフワークであるcarboxylesterase (CES)の研究は、故北川晴雄教授の主宰する薬物学研究室で佐藤哲男先生のもとで始まりました。1985年に博士課程修了後、東京薬科大学助手として第一薬理学（佐藤哲男教授）臨床生化学（須賀哲也教授）の2研究室を渡り歩いた後、1990年に米国NIEHS/NIHの客員研究員として留学し、1992年に千葉大学に戻りました。2005年から現在の千葉科学大学に赴任し、薬物動態学研究室を立ち上げました。しかし幸か不幸か、2010年から薬学科長、2012年から薬学部長/研究科長を拝命し、CESの研究の他に学部運営に携わることとなりました。とある先生から「学部長職は真面目にやると抜け出せなくなるから手を抜いた方が良い」という大変ありがたい助言を頂いたのですが・・・、思いの外長くなりました。この3月でようやく解放されることとなり、定年までの残り5年間で有効に使いCESの研究でもう一花咲かせたいと考えております。幸いなことに、本学から千葉大学大学院（石川勉教授）に進学した高橋正人博士を助教として研究室に迎えることが出来ましたので、プロドラッグの合成を武器に新しい分野を開拓していきたいと思っております。一見、順風満帆のようですが、途中失業するなど紆余曲折の末、千葉大学薬学部の同窓生からの暖かいご支援により今の自分があるので、日々感謝しております。（昭和60年博士課程修了）

川島 美智子（総合病院国保旭中央病院）



卒業して30年が経ちました。10年ひと昔と言いますが、こうして文字にして見ると月日の流れを改めて実感します。卒業後まもなく結婚し、3人の子育てを経て、現在も病院薬剤師として働いております。入職した当時は、調剤室での調剤が中心でしたが、患者中心の医療へと移りゆく中で、業務も多様に拡大し、今ではチーム医療の名のもとに病棟で多くの時間を過ごし、抗がん剤調製や治験業務に携わり、地域連携や医療安全に取り組んでいます。また、薬学実務実習への関わりを契機に、学生時代にお世話になった諸先生方や同級生方と再会する機会に恵まれ、新たな交流を続けています。

近頃では、続々と上市される新薬に、寄る年波の壁を感じています（すんなり頭の引き出しに納まりませんが、近日には認定試験をひかえており、毎日煩惱と戦いながら、春の訪れと心の解放を待ち望んでいる状況です。

「時は金なり」、「光陰矢のごとし」。まさに今の我が身に響く言葉です。今回この原稿を書くにあたり、大学時代へ思いを馳せ、良き友、良き恩師の方々と出会え、貴重な時間を過ごせた千葉大での4年間で懐かしく思い返しました。このような機会を頂戴し心より感謝しております。（昭和63年卒業）

吉田 淳（厚生労働省医政局研究開発振興課治験推進室長）

厚生労働省で治験や臨床研究の実施を推進する仕事をしています。臨床研究中核病院を中心とした国際水準の臨床試験を行うためのネットワーク及びプラットフォームづくりや2018年4月に施行された臨床研究法の適切な運用と普及に取り組んでいます。修士課程を修了後、1991年4月に当時の厚生省に入りました。あれから28年、薬系技官(薬剤師資格を持つ技官)として主に国際協力、安全対策、研究開発に関わる行政に長く携わってきました。その間、世界保健機関において多国間協力の技術調整、国立がん研究センターにおいて研究企画と研究費配分、国立医薬品食品衛生研究所において医薬品医療機器等及び食品安全のレギュラトリーサイエンスに関する企画調整、内閣官房において健康医療戦略の策定実施に係る企画調整にも携わりました。そして何よりも、自分の好奇心と妻の理解があって、当時ではまだ珍しかった育児休業も取得しました。これらの経験は全て、現在本省の管理職としての業務や人材のマネジメントに役立っています。アカデミアや製薬企業、病院や薬局だけでなく、霞が関にも薬学を学んだ者には幅広い活躍できる場所が広がっています。これからも行政を目指す千葉薬の人材に期待しています。

(平成元年卒業)

出浦 和彦（千葉県健康福祉部薬務課 副課長）



千葉県職員となり、四半世紀が過ぎました。県の行政薬剤師は、県庁、健康福祉センター（保健所）、衛生研究所等で、薬務、医務、食品衛生、環境衛生等の許認可・監視指導、感染症対策、調査研究等の業務のほか、近年では医療政策、災害医療対策、健康危機管理、産業振興等の幅広い業務に従事しています。私自身、県職員になる前は、様々な不安がありましたが、入庁以降、多くの先輩、同僚等に優しく、時には厳しく支えていただき、今日まで楽しく業務を続けていくことができました。なかでも、医療法、薬事法（当時）が改正され、医療機関や薬局の機能情報を広く提供する制度が創設された際、医療を受ける者、医療提供者、学識経験者等の多くの関係者から様々な御意見をいただきながら、患者さんの医療提供施設検索ツールである「ちば医療ナビ」を立ち上げた事業は印象に残っています。数年前に、東京で開催された87P・91PM合同同期会では、久しぶりに千葉大学の仲間と再会し、懐かしく交流できました。こうした絆を大切に、県民ファーストの視点でこれからも頑張っていきたいと思っています。

(平成5年修士課程修了)

西村 健（筑波大学医学医療系）



「ああ、もう！何度言ったら分かるかなあ（怒）！」

私は現在、筑波大学医学医療系において、准教授として幹細胞工学、分子生物学関係の研究を行う傍ら、日々、こんな感情を抱きながら、学生の指導を行なっております。まがりなりにもアカデミアの世界で生き残れているのは、千葉大学在学時、臨床化学研究室（当時）において、五十嵐先生をはじめとした先生方から受けた御指導の賜物であると、大変感謝しております。ただ、学生指導の苦労話を、直接指導を受けた柿沼先生（故人）ともうお話しできないことが残念でなりません。

ひと学年100人にも満たない千葉大学薬学部ですが、最近、関係者との縁を感じる機会が多くあります。仕事では、研究室の先輩が偶然にも私が着目している分子に興味を持たれており、研究材料をお渡しする機会がありました。趣味では、同じ市民オーケストラにおいてプロ顔負けの音を奏でるオーボエ奏者が、薬学部の先輩であることが発覚しました。そして子育てでは、子供の入学式でばったり同級生夫妻に会ったと思ったら、同じ学校に入学していてビックリしました。

こんな縁を今後も大切にしていきたいと思っておりますので、大学卒業以来一回しか開催していない同窓会をまた開催して、四十半ばのおじさんおばさんたちが集まる機会を作っても面白いかなと考えています。もし御興味のある1993年入学組の方がいらっしゃいましたら、西村 (ken-nishimura[at]md.tsukuba.ac.jp) までご連絡頂ければ幸いです。

(平成11年修士課程修了)

長田 敏明 (武田薬品工業株式会社 ファーマシューティカル・サイエンス, プロセスケミストリー)

私は、故 日野亨先生と中川昌子先生のご指導の下、博士前期課程にて複素環化合物の化学の基礎を学びました。その後、武田薬品工業に入社し、臨床前から臨床前期の医薬品候補化合物 原薬の製造ルート設定、GXP品質設計、供給、コスト削減、および基盤技術研究の業務に現在も携わっております。原薬には、低分子に中高分子が加わり、モダリティーと呼ばれる化合物群を若手研究者らとともにチームで主担しております。その間、プロセスケミストとして修練を積んだ2000年から中川昌子先生、西田篤司先生をはじめとした多くの方々に機会や支えをいただき、新設の社会人コースにて博士後期課程を無事修了しました。その経験は自身の尊い宝物です。

医薬品のR&Dは、グローバルかつ部門横断で、より幅広く深い専門性が個人に要求されております。しかし、人の縁や和を大切に、自身の原点や基礎はぶれることなく、主張すべくは主張し、いろいろなことにチャレンジすることが大切と考えます。そのために、学生の皆様には、自身の原点を基礎として育む今を、将来の目標に向かって大切にさせていただきたいです。

最後に、チームの開発品に自身も助けられた経験がございます。このため、一粒の医薬品への多くの思いは変わらないです。より安全な医薬品を少しでも早く・安く。
(平成15年博士課程修了)

染川 麗良 (独立行政法人医薬品医療機器総合機構)



千葉大では学部、院と9年間過ごしましたが、今思えば、講義室での定位置が一番後ろ、何かとピンチで目の前の困難に気を取られ、将来の心配ばかりしていました。あの頃の自分に声をかけるなら、「素晴らしい環境にいることに感謝して、今を存分に楽しんで！勉強もしっかり！！」と言いたいです。とはいえ、在学中は良い思い出ばかりで、先生方や友人達が何事にも思慮深く真摯に取り組む姿には、多くの感銘を受けました。物事の考え方の基盤を得られたことは大きな財産です。薬学の講義、短期のドイツ語留学やノートテイク等の他学部との交流…。実際社会に出て、経験できたことのありがたみを感じます。

昨年の春、息子連れて亥鼻キャンパスを久々に訪れました。病院に向かう道が満開の桜でトンネルのようになっており、とても美しかったです。グラウンドを左手に見て、ソフトボール大会も懐かしく思い出しました。息子はまだ幼いですが、この先彼なりの素晴らしい出会いがあるよう、亥鼻の桜を見ながら願いました。

現在は、PMDAで一般用医薬品の審査に携わり丸9年経ちました。セルフメディケーション税制も始まり、財政面でもOTC医薬品の活用が求められていますが、自分の健康を自分で管理できることは、人生の質も高めることにもつながります。業務では科学的な側面だけでなく、誰でもが自ら判断し正しく安全に医薬品を使用できるようにするところにやりがいがあります。審査で関わった医薬品を店頭で見かけるとやはり嬉しいですね。今に感謝して、楽しみながら、社会貢献できればと思います。
(平成17年卒業)

竹内 典子 (名古屋大学医学部附属病院 薬剤部)

2011年3月に医薬品情報学研究室 上田志朗教授のご指導のもと博士課程を修了して、早8年が過ぎました。千葉が思いのほか遠くなってしまいましたが、職場にも千葉大学医学薬学府にご縁のある方々がいらっしやいますので、亥鼻での懐かしい話題がもちあがることもあります。

私の勤務先の薬剤部では、調剤室、注射調剤室、製剤室、麻薬室、薬歴管理室、高度医療薬剤支援室、薬務室、試験室、薬品情報室、医薬品安全管理支援室、治験薬管理室、未承認新規医薬品等管理室、実務実習担当にわかれ、90名を超える薬剤師が働いています。1年目は一通りの調剤・製剤を行い、2、3年目は病棟へ、私の場合は4年目からは薬品情報室など、そして現在は治験薬管理室に配属されています。治験薬の調剤はもちろんです、治験に関わる資料を読み込み、院内でどのように実施するのかといった運用手順を考えるとところから業務が始まります。これまで経験してきた仕事の流れを思い浮かべつつ、各部署にとって負担の少ない運用を細部にわたって考えるのは悩ましいことですが、何より面白みのある部分でもあります。準備を重ねたつもりでも、いざ始まると至らない部分があり、先輩方にご指摘をいただくことは多々ありますが、そのたびに反省して学び、次に活かせるよう前を向く日々です。研究室で一つのテーマに深く向き合った日々を思い出して、一つひとつ誠意を込めて取り組んでいます。
(平成19年修士課程修了)

研究室便り

他の研究室は次号に掲載します

薬品合成化学

卒業生の皆様、元気にお過ごしでしょうか？ 薬品合成化学研究室では西田篤司教授のもと、教室全員が一致団結して有機合成化学の研究に打ち込んでいます。昨今の大学院生は、アジア諸国への短期留学や国際学会での英語発表に積極的に取り組んでおり、頼もしく思います。現在は学位論文発表会に向けて論文執筆・追い込み実験で皆集中して取り組んでおり、素晴らしい発表を期待しています。2月から3年生の配属予定で、新メンバーとともに新しい合成化学を展開していく所存です。お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りください。



5名が製薬会社の研究職（アステラス製薬、佐藤製薬、第一三共、第一三共RDノバーレ、日本ベーリンガーインゲルハイム）で活躍しています。2018年度は、海外雑誌に10報の論文を発表、また4名の学生が諸学会で優秀発表賞を受賞しました。9月には、静岡県立大学との第一回合同セミナーを武田薬品工業で行うなど、外部機関と積極的に交流しました。研究室もグローバル化の波に乗り、中国・インドネシアからの留学生計5名が大学院生として在籍し、また日本とタイの交換留学も引き続き盛んです。メンバー一同多忙ながら充実した研究生活を送っています。



生体機能性分子

30年度は高山教授、北島准教授、小暮助教と博士課程6名、修士課程9名、学部5年生3名、学部4年生5名の計23名の学生が在籍し、アルカロイドをターゲットにした合成研究、成分探索研究、医薬化学研究に取り組みました。

今年は博士課程2年の小野沢忠吉くんが千葉大学の支援によりドイツのドレスデン工科大学に短期留学し、さらに第60回天然有機化合物討論会奨励賞（ポスター発表の部）を受賞しました。

博士課程3年の和田健太郎くんの学位論文題目は「*Lycopodium*アルカロイドLycopodine類の生合成経路を模擬した不斉全合成研究」です。その他研究業績や学位論文の題目等にご興味のある方は研究室のHPをご覧ください。



遺伝子資源応用

本年度も植物の薬理成分や機能性成分の生合成研究に精力的に取り組んでいます。平成30年11月には、斉藤和季教授が「天然資源系薬学・植物分子科学研究」により秋の紫綬褒章を受章しました。写真は研究室員で受章をお祝いした時に撮影したものです。斉藤教授のご指導のもと研究室OB/OGの皆様や現研究室員が携わった研究成果が高く評価されましたことを、研究室員一同大変喜んでおります。最近の研究活動の詳細については、研究室ウェブサイト (<http://www.p.chiba-u.jp/lab/idenshi/>) をご覧ください。日々楽しみながら真剣に研究に励んでおりますので、今後とも温かいご支援をお願い申し上げます。



製剤工学

本年6月から、植田助教がPurdue大学に留学します。本年の卒業生5名は、2名が博士後期課程に進学、

分子細胞生物学

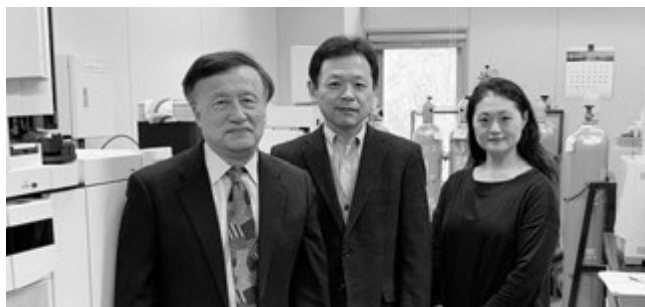
今年度は、教員2名、博士3名、修士4名、学部生9名が在籍し、がん細胞のシグナル伝達の研究に取り組んでいます。昨年度と同様、分子心血管薬理学研究室

高野博之教授・山口憲孝准教授と共同研究連携を行っています。現在、チロシンリン酸化によるエピジェネティクス制御とクロマチンリモデリング、上皮間葉転換シグナル、DNA損傷シグナルなどに関する独創的で先端的な核内シグナル伝達の研究が進んでいます。平成30年度日本生化学会大会と第62回日本薬学会関東支部大会では、岡田和之君と竹洞裕貴君が優秀発表賞に選ばれました。なお、山口直人教授は今年度末に定年退職の予定です。卒業生の皆様、ぜひともお気軽にお立ち寄りください。



環境リスク

環境リスク研究室では、環境中に存在する化学物質の有害性メカニズムや曝露評価を研究しています。つくば市にある国立環境研究所に設置された連携講座で、中島大介教授（環境リスク・健康研究センター、主席研究員）、青木康展教授（同フェロー）、小林弥生准教授（同主任研究員）が教員として所属しています。主なテーマは、大気や環境水の化学測定と毒性測定の統合化に関する研究、災害等における環境モニタリング手法の開発、環境から曝露される化学物質が生体内で突然変異を誘発する機構、ヒ素やセレンなどのメタロイドの代謝機構などの研究です。環境省等の施策としての化学物質リスク評価にも貢献しています。



生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、現在、教員3名（伊藤晃成教授、青木重樹講師、竹村晃典特任助教（国際創薬学研究室所属））、大学院生10名（博士課程3名、修士課程7名）、学部生7名の体制で、医薬品による副作用発現の分子メカニズム解明とこれに基づく副作用回避に向けた研究に取り組んでいます。4月に青木重樹助教が講師に昇任し、博士課程の竹村晃典君が特任助教として着任しました。昨年は、博士課程の薄田健史君がカナダのアルバータ大学薬学部で短期留学し、4月から日本学術振興会の海外特別研究員として同じカナダの研究室に羽ばたいていきました。また、昨年7月には関根秀一講師が退職し企業の研究者へ、今春3月の修了生・卒業生は企業の研究・開発職などへと、そ

れぞれの道に進んでいきました。研究室のホームページも是非覗いてみて下さい。



臨床薬理学

平成30年度は、3名の教員と博士課程11名（社会人大学院生6名）、修士課程1名、学部生16名の計32名が在籍しています。また1月よりインドからSheelendra Singh博士がJSPS外国人特別研究員として4カ月間滞在しています。樋坂教授が関わってきた薬物相互作用ガイドラインが発出され、畠山助教が進めている免疫チェックポイント阻害剤研究について製薬企業との共同研究が開始されるなど、医療への貢献を目指してWetとDry、基礎から臨床にわたり、多種多様な研究テーマが進んでいます。研究室旅行は山梨でブドウ狩りや美味しいワインを堪能しました。卒業生の皆様、どうぞ気軽にお立ち寄りください。



医療薬学

2019年4月現在、医療薬学研究室は石井伊都子教授、鈴木貴明講師、内田雅士助教の教員3名と、学部学生5名（6年生1名、5年生2名、4年生2名）が在籍しております。日々のセミナーや行事（旅行など）は研究室と医学部附属病院の薬剤部が合同で行っており学生と薬剤部職員が風通し良く交流を行っています。研究面では動脈硬化に関連した基礎・臨床研究のほか、医学部附属病院の薬剤師と連携し臨床上の問題点を解決することを目指した研究を行っています。医療に役立つ情報を創出できるよう多方面と協同して取り組んでいきたいと考えています。



サークル紹介

千葉大学薬友会ゴルフ

11月19日、埼玉の名門、日高カントリー倶楽部に薬友会ゴルフコンペを開催しました。予定は12名でしたが、直前にお一人が不慮の怪我をされたため参加を断念して11名でのコンペとなりました。当日は天候に恵まれ風もなく快適なコンディションでしたが、グリーン周りの難しいセッティングに悪戦苦闘することになりました。砲台状の早いグリーン周りを刈り込んであるため、正確なショットでないと折角グリーンを捕えても転がってこぼれ落ちる始末です。そのような状況下でも横田氏が普段通りの実力を発揮され、優勝の栄冠を勝ち取られました。

以下に結果と会計を報告します。

優勝：横田友三郎、ハンデ 22.8、ネット 72.2
 2位：勝浦 公男、ハンデ 16.8、ネット 75.2
 3位：片野 清昭、ハンデ 27.6、ネット 75.4

本会は、新ペリア方式で初心者から上級者まで、誰もが対等に楽しめる気さくなゴルフコンペです。春秋の年2回開催しており、ゴルフを楽しみながら卒業生同士の交流を図ることができます。

皆様のご参加を心より歓迎しますので、ご興味のある方は幹事までお問合せ下さい。

次回は2019年5月17日（金）大宮ゴルフコースを予定しています。交通の便の良い美しい林間コースで、皆様の参加をお待ちしています。

幹事：勝浦公男（S44年卒）

03-3565-3428、kkkse2233kat@ceres.ocn.ne.jp
 （勝浦 公男）



みのはな山岳会

今年は結成60年になります。当初は海外遠征など高い目標もこなしてきましたが、剛健なメンバーも高齢化には勝てず、最近では月に1回の軽めの山行と、年に1～2回宿泊を伴う観光兼山行を続けています。昨年は6月に佐渡一周、11月は安土城址から琵琶湖を望み、翌日、京都・大文字山の点火場所へ登りました。ここ数年の1月は初詣と称し、東京近郊の神社やお寺に足を運んでいます今年も柴又帝釈天で境内の彫刻や庭園をゆっくり見学しました。

今月6月には60周年記念を祝し上高地に集い昔を語り合い楽しむ事になっています。ゲスト参加も歓迎です

（問い合わせ先：e-mail atukak@fb3.so-net.ne.jp）。

この60年を回顧すると、山岳会の立ち上げ、維持発展に献身的に携わった諸兄弟が幽明界を異にしております。【合掌】（安部 知代、西井戸淳子）



薬学茶道部

薬学部茶道部は、毎週金曜日の4時から7時に、薬学部Ⅱ期棟中会議室にて活動しています。表千家の先生をお呼びして、お点前の稽古をしています。先生はとてもお優しい方で、丁寧に作法を教えてくださいるので、楽しく茶道を学ぶことができます。主菓子は、部活前に一年生が選んで買ってきます。様々な種類の主菓子を頂けるので、毎回楽しみに思っています。大学祭では着物を着て、茶会を開きます。毎年多くの方が来てくださるので、丁寧なおもてなしができるよう、日々練習に励んでいます。少人数で、先輩後輩の仲も良く、和やかな雰囲気の部活です。初心者も多く、茶道を始めるのには最適な環境だと思います。もちろん、経験者の方も大歓迎です。



薬学部東洋医学研究会

東洋医学研究会は本年度で創設80周年を迎えます。近年、年を経るごとに部員が著しく増え、活動も賑やかになりました。写真は昨年8月に行った夏実験の様子です。医学部東洋医学研究会と合同で行われ、薬学部3年次を主宰として、1年次から6年次まで幅広い学年が参加しました。本実験では、生薬特有の親和性や抗酸化作用を利用して、様々なカレー粉に対して含まれている生薬の同定を行いました。

記念の年となりますので、この機会により一層気を引き締め、自らの知識を向上させ、また見聞を広めていきたいと思えます。つきましては、温かい目でこれからも本研究会を見守っていただけましたら幸いです。



学部だより

教員の人事異動

◎採用者

30. 8. 1	田中 佑樹	助教	予防薬学 (国際創薬学 特任助教より)
30.10. 1	山崎 由貴	特任助教	医薬品情報学
30.11. 1	原 康雅	特任助教	国際創薬学 (大阪大学 特任助教より)
31. 1. 1	本田 拓也	助教	薬効薬理学 (薬効薬理学 特任助教より)
31. 2. 1	廣瀬 慎一	特任助教	医薬品情報学 (マツモトキヨシより)
31. 4. 1	西田 紀貴	教授	薬品物理化学 (東京大学 准教授より)
31. 4. 1	原 康雅	助教	活性構造化学 (国際創薬学 特任助教より)
31. 4. 1	岡本 悠佑	特任助教	国際創薬学 (病態分析化学 特任助教より)
31. 4. 1	竹村 晃典	特任助教	国際創薬学

◎退職者

30. 7. 31	関根 秀一	講師	生物薬剤学 (企業へ)
30. 7. 31	田中 佑樹	特任助教	国際創薬学 (予防薬学 助教へ)
30. 8. 31	米田 友貴	助教	薬品物理化学 (北海道大学 助教へ)
30. 9. 24	平川城太郎	助教	免疫微生物学 (企業へ)
31. 1. 31	境 隆一	特任助教	医薬品情報学 (マツモトキヨシへ)
31. 3. 31	荒野 泰	教授	分子画像薬品学 (定年退職)
31. 3. 31	原 康雅	特任助教	国際創薬学 (活性構造化学 助教へ)
31. 3. 31	岡本 悠佑	特任助教	病態分析化学 (国際創薬学 特任助教へ)

◎昇任

31. 4. 1	青木 重樹	助教より講師へ昇任	生物薬剤学
----------	-------	-----------	-------

◎配置換

31. 4. 1	山形 一行	特任助教	国際創薬学 (医学研究院特任助教へ)
----------	-------	------	--------------------

2019年度 大学院医学薬学府入学者の状況（4月入学者）

修士（薬学領域）入学 49名：総合薬品科学専攻49名
博士（薬学領域）入学 20名：先端医学薬学専攻（4年制）9名
先端創薬科学専攻（3年制）11名

第104回 薬剤師国家試験合格状況

平成31年2月23日～2月24日実施
新卒合格者 92.50%

2018年度 卒業生・修了生の進路

学部4年制 46名

進学 40名：千葉大学大学院医学薬学府修士課程（40名）
企業 3名：(株)サンキョー、(株)オールアバウト、(株)コムテック
その他 3名

学部6年制 40名

進学 2名：千葉大学大学院医学薬学府博士課程（薬学領域）（2名）
病院 13名：明理会中央総合病院、大船中央病院、船橋市立医療センター、諏訪赤十字病院、日本医科大学
付属病院、済生会横浜市南部病院、医療法人社団苑田会苑田第一病院、東京医科大学病院、国立国際医療研究センター病院、JR東京総合病院、千葉大学医学部附属病院、東京医科大学八
王子医療センター、都立広尾病院

企業 23名：日本調剤(株)（7名）、ヤンセンファーマ(株)、第一三共(株)（2名）、塩野義製薬(株)、大塚製薬(株)、
大正製薬(株)、アステラス製薬(株)、(株)常盤植物化学研究所、イーピーエス(株)、クラフト(株)、持田
製薬(株)（2名）、東京化成工業(株)、佐藤製薬(株)、田辺三菱製薬(株)、ファイザー R&D 合同会社

公務員 2名：さいたま市、東京都

修士修了 65名

進学 10名：千葉大学大学院医学薬学府博士課程（10名）
企業 49名：ライオン(株)、信越化学工業(株)、日本新薬(株)（3名）、WDB(株)エウレカ社（2名）、マルホ(株)（2名）、
杏林製薬(株)、味の素(株)、(株)ツムラ、DIC(株)、(株)ACメディカル、大鵬薬品工業(株)、Meiji Seikaファ
ルマ(株)、JSR(株)、国立研究開発法人新エネルギー産業技術総合開発機構、(独)医薬品医療機
器総合機構（2名）、富士薬品(株)、カーリットホールディングス(株)、IQVIAサービシーズジャ
パン(株)、(株)ワールドインテック、日本セドック(株)、日本コルマー(株)、富士フィルムエレクトロ
ニクスマテリアルズ(株)、(株)大塚製薬工業、アステラス製薬(株)（2名）、日本ベーリンガーイン
ゲルハイム(株)、生化学工業(株)、第一三共(株)（2名）、第一三共RDノバール(株)、中外製薬(株)（2名）、
(株)生活の木、三井化学(株)、小野薬品工業(株)（2名）、ユーロフィンNDFC F&E(株)、塩野義製薬(株)、
横浜ゴム(株)、(株)資生堂、(株)EP総合、FMD K&L Japan(株)、(株)エスアールディ、リニカル(株)

公務員 2名：農林水産省、千葉市

未定 1名

その他 3名：科目等履修生（3名）

博士修了 20名

企業等 8名：(独)医薬品医療機器総合機構（2名）、第一三共(株)、中外製薬(株)、日本メジフィジックス(株)、
(株)モルシス、理化学研究所生命医科学研究センター、興和(株)、

ポストドクター 3名：アルバータ大学、千葉大学大学院薬学研究院（2名）

教員 2名：千葉大学大学院薬学研究院（2名）

帰国 3名

未定 2名

その他 2名

2019年度薬学部入学者の状況

入学者90名（男45名、女45名：推薦10名、前期67名、後期12名、帰国子女1名）

出身高校一覧

- 3名 県立浦和（埼玉）、新宿（東京）
2名 清真学園（茨城）、県立川越（埼玉）、県立千葉（千葉）、千葉東（千葉）、県立船橋（千葉）、薬園台（千葉）、
市川（千葉）、東邦大学付属東邦（千葉）、芝浦工業大学柏（千葉）、東京学芸大学附属（東京）、日比谷（東京）、
女子学院（東京）、開成（東京）、鷗友学園女子（東京）、豊島岡女子学園（東京）、湘南（神奈川）、逗子
開成（神奈川）、藤島（福井）
1名 札幌光星（北海道）、立命館慶祥（北海道）、山形東（山形）、安積（福島）、水戸第一（茨城）、緑岡（茨
城）、土浦第二（茨城）、栃木（栃木）、県立前橋（群馬）、市立太田（群馬）、浦和第一女子（埼玉）、星野
（埼玉）、開智（埼玉）、東葛飾（千葉）、木更津（千葉）、国府台女子学院高等部（千葉）、八千代松陰（千
葉）、渋谷教育学園幕張（千葉）、国分寺（東京）、戸山（東京）、八王子東（東京）、両国（東京）、桜修館
（東京）、芝（東京）、頌栄女子学院（東京）、國學院大學久我山（東京）、錦城（東京）、横浜翠嵐（神奈川）、
川和（神奈川）、柏陽（神奈川）、県立横須賀（神奈川）、厚木（神奈川）、南（神奈川）、横浜共立学園（神
奈川）、高田（新潟）、金沢大学附属（石川）、甲府南（山梨）、県立長野（長野）、屋代（長野）、上田（長
野）、松本県ヶ丘（長野）、松本深志（長野）、沼津東（静岡）、静岡（静岡）、北野（大阪）、近畿大学附属
広島（東広島校）（広島）、球陽（沖縄）、Farmington Hills Harrison High School（アメリカ）

2018年の受賞記録

【教員の受賞】

- 平成30年3月 日本薬学会学術振興賞 荒井 秀 (薬品合成化学)
- 平成30年3月 日本薬学会賞 高山 廣光 (生体機能性分子)
- 平成30年4月 日本生薬学会論文賞 山崎 真巳・Rai Amit・齊藤 和季 (遺伝子資源応用研究室)
- 平成30年7月 国際メタボロミクス学会終身名誉フェロー 齊藤 和季 (遺伝子資源応用研究室)
- 平成30年7月 第2回日韓若手薬剤学研究者ワークショップ KJYSP Chair's Selection Award
畠山 浩人 (臨床薬理学)
- 平成30年7月 第18回遺伝子・デリバリー研究会奨励賞 田中 浩揮 (薬物学)
- 平成30年9月 日本生薬学会賞 石橋 正己 (活性構造化学)
- 平成30年11月 「天然資源系薬学・植物分子科学研究」により秋の紫綬褒章
齊藤 和季 (遺伝子資源応用研究室)
- 平成30年11月 第3回トランスポーター研究会関東部会最優秀発表賞 山崎 由貴 (医薬品情報学研究室)
- 平成30年11月 Asian Core Program Lectureship Award (Malaysia) 根本 哲宏 (薬化学研究室)
- 平成30年11月 日本毒性学会生体金属部会研究奨励賞 鈴木 紀行 (予防薬学)
- 平成30年11月 Asian Core Program Lectureship Award (Singapore) 根本 哲宏 (薬化学研究室)
- 平成30年12月 Highly Cited Research 2018 (クラリベイト・アナリティクス社)
齊藤 和季 (遺伝子資源応用研究室)
- 平成30年12月 2019年度日本薬学会学術振興賞 荒井 緑 (活性構造化学)

【学生の受賞】

- 平成30年3月 第138回日本薬理学会関東部会優秀発表賞 石井 貴浩 (分子心血管薬理学)
- 平成30年3月 日本薬学会第138年会優秀発表賞 薄田 健史 (生物薬剤学)
- 平成30年3月 日本薬学会138年会優秀発表賞 中嶋 早紀 (薬品合成化学)
- 平成30年3月 日本薬学会第138年会優秀発表賞 塩川 絢子 (予防薬学)
- 平成30年3月 日本薬学会第138年会優秀発表賞 (ポスター発表の部) 中谷 泰貴 (遺伝子資源応用)
- 平成30年3月 日本薬学会第138年会 優秀発表賞 原 来実 (臨床薬理学)
- 平成30年3月 第5回千葉質量分析懇談会優秀発表賞 山崎 由貴 (薬物学)
- 平成30年5月 日本薬剤学会第32年会最優秀発表賞 砂塚 祐志 (製剤工学)
- 平成30年5月 日本薬剤学会第32年会永井財団学部学生七つ星薬剤師奨励賞 石本 有沙 (製剤工学)
- 平成30年7月 第2回日韓若手薬剤学研究者ワークショップ KJYSP Chair's Selection Award
栗野 泰大 (臨床薬理学)
- 平成30年8月 日本薬剤学会第43回製剤・創剤セミナー Best poster presentation award
岡本 裕太 (製剤工学)
- 平成30年9月 第62回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞 近藤 優衣 (生化学)
- 平成30年9月 第62回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞 西村 公樹 (製剤工学)
- 平成30年9月 第91回日本生化学会大会若手優秀発表賞受賞 岡田 和之 (分子細胞生物学)
- 平成30年9月 第62回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞受賞 竹洞 裕貴 (分子細胞生物学)
- 平成30年9月 1st International Symposium of Soft Molecular Activation Research Center
(1st SMARC) BEST POSTER PRESENTATION 稲垣 早紀 (薬品合成化学)
- 平成30年9月 第60回天然有機化合物討論会奨励賞 (ポスター発表の部) 小野沢忠吉 (生体機能性分子)
- 平成30年9月 千葉大学SMARC国際シンポジウム ポスター賞 蒔田 吉功 (活性構造化学)
- 平成30年9月 第4回次世代を担う若手のためのレギュラトリーサイエンスフォーラム優秀発表賞
石川 彩夏 (臨床薬理学)
- 平成30年9月 第12回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム 優秀発表賞 照井 亜侑 (臨床薬理学)
- 平成30年11月 第6回メタロミクス研究フォーラム/第104回プラズマ分光分析研究会プラズマ分光分析研究会
最優秀講演賞 高橋 一聡 (予防薬学)
- 平成30年12月 MCRC Symposium Best Poster賞 本間 榛花 (薬化学)

薬友会より

<薬友会ホームページ>

薬友会ホームページ (<http://yakuyukai.net/>) には、同窓会開催のお知らせや薬友会情報などを掲載しております。情報掲載のご希望は、下記の薬友会事務局までご連絡ください。

<薬友会事務局>

薬友会に関するご質問、住所変更等のご連絡は下記までお願いします。

【薬友会HP「お問い合わせ」フォーム】：<http://yakuyukai.net/contact>

【Eメール】：yakuyukai@chiba-u.jp

【F A X】：043-226-2930

<ご寄付のお願い>

薬友会のさらなる活性化のため、ご寄付をお願い申し上げます。

一口2千円から随時受け付けています。同封の振込用紙に、①氏名、②住所、③卒業年度をご記入ください。

■郵便局より振込の場合

振替口座 00150-5-551796 千葉大学薬友会

■他金融機関より振込の場合

銀行名：ゆうちょ銀行	店名：〇一九（ゼロイチキュー店）	店番：019
預金種目：当座	口座番号：0551796	口座名：千葉大学薬友会

<2019年度各種委員会名簿>

(○印：委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。)

- 総務委員会 ○齊藤 和季、山崎 真巳、吉本 尚子、村上 泰興、西田 篤司（前委員長：アドバイザー）
財務委員会 ○石橋 正己、荒井 緑、村上 泰興、伊藤 素行（前委員長：アドバイザー）
名簿委員会 ○伊藤 晃成、青木 重樹、村上 泰興、樋坂 章博（前委員長：アドバイザー）
事業委員会 ○小椋 康光、鈴木 紀行、田中 佑樹、伊藤 素行（前委員長：アドバイザー）
広報委員会 会報担当部門：○高野 博之、関根 祐子、山口 憲孝、石川 雅之、
秋田 英万（前委員長：アドバイザー）



第28回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日時：2019年7月13日（土）

13：00～16：00

場所：千葉大学薬学部120周年記念講堂

（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）

（〒260-8675

千葉市中央区亥鼻1-8-1）

主催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

共催：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師研修センターより単位が認定されます。）

テーマ：「薬学における法中毒学・

裁判化学の復古を目指して」

生涯教育セミナー

1) 「薬物による健康被害を防ぐために」

花尻 瑠理 先生（国立医薬品食品衛生研究所）（薬友会員 S63年卒）

2) 「薬物乱用と分析化学—薬物鑑定業務の経験から—」

牧野由紀子 先生（東京大学大学院薬学系研究科・元麻薬取締官）

3) 「薬学と科学捜査」

大森 毅 先生（科学警察研究所）（薬友会員 S62年卒）

宮木高明記念講演会

「日本の法医学の動向と薬物検査」

岩瀬博太郎 先生（千葉大学大学院医学研究院・東京大学医学系研究科・千葉大学法医学教育研究センター）

終了後懇親会があります。 医薬系総合研究棟Ⅱ 大会議室（記念講堂の階下）

セミナー参加費 無料

意見交換会(懇親会)参加費 3,000円（当日）

参加申込み 不要です。当日お越しください。

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院予防薬学研究室 小椋康光までお願いいたします。

（電話／FAX：043-226-2944 email: ogra[at]chiba-u.jp）



・JR千葉駅、京成千葉駅到着後、JR千葉駅東口正面7番のバス乗り場から「千葉大学病院」行きバス、または「南矢作」行きバスに乗り、「千葉大学薬学部前」で下車。約15分

薬剤師卒後教育研修講座開催のお知らせ

本講座は既卒の薬剤師を主な対象とする勉強会ですが、どなたでも参加できます。千葉大学大学院薬学研究院・薬友会・医学部附属病院薬剤部が共催します。2019年度は次の日程・演者で開催します。

●第115回 2019年4月21日（日）13-16時「薬物相互作用を考える」

米澤 淳（京大病院薬剤部）、百 賢二（東大医科学研究所病院）、岩本 卓也（三重大病院）。

この回は特別な試みとして日本医療薬学会第4小委員会とも共催になります。

●第116回 2019年10月12日（土）14-17時「がん、在宅医療、緩和医療を考える」

金子 裕美（千葉大病院）、畠山 浩人（千葉大院薬）、上園 保仁（国立がん研究セ）

●第117回 2019年11月30日（土）14-17時「感染症、心不全、在宅医療を考える」

講師：高野 博之（千葉大院薬）、他2名講演予定

各回とも千葉大学けやき会館大ホール（西千葉キャンパス）で開催、参加費2000円・学生無料、予約不要です。各回とも日本薬剤師研修センターと日本緩和医療薬学会の集合研修認定を受ける予定です（各2単位）。また第116回より日本病院薬剤師会・病院薬学認定薬剤師の認定も準備中です。詳細は薬友会のホームページに掲載します。また、<http://www.p.chiba-u.jp/lab/cpp/seminar.html>ではこれまでの活動をご覧いただけます。ご不明な点は臨床薬理学研究室 佐藤洋美（TEL：043-226-2877）までお問い合わせ下さい。

編集後記

薬友会会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。また、ご寄稿頂いた皆様にお礼申し上げます。

広報委員会 会報担当部門

高野 博之（委員長）、関根 祐子、山口 憲孝、石川 雅之、秋田 英万（前委員長）